

●●きいてナットク、みてナットク!●● トリッキーな作品をより楽しむためのトークイベント

開幕記念イベントI 「アーティストと旅する美術展」

9月15日(土)11:00~12:00

益田ゆかりのアーティスト3名による作品解説。
参加アーティスト:大畑稔浩、野村康生、平川紀道
参加無料/申込不要(展示室前集合)
※企画展観覧券またはミュージアムパスポートが必要

開幕記念イベントII 座談会「展覧会のひみつをのぞく」

9月15日(土)14:00~15:30

本展を企画した学芸チーム「トリメガ研究所」が展覧会の意図や裏話を披露。
出演:工藤健志(青森県立美術館総括学芸主幹)、
村上敬(静岡県立美術館上席学芸員)、川西由里(当館専門学芸員)
会場:講義室/入場無料/当日先着40名

科学×芸術対談「見えない世界を見たいーサイエンスとアートの挑戦」

10月13日(土)14:00~15:30

身体の内部を見せるバイオイメージング技術に取り組む科学者と、肉眼では見えない世界を描く画家の異分野コラボレーション。
出演:曾我公平(東京理科大学基礎工学部教授)、
野村康生(本展出品作家、益田市出身)
会場:講義室/入場無料/当日先着40名
協力:科研費新学術領域「レゾナンスバイオ」

スペシャルトーク「空から見る島根県」

11月3日(土・祝)14:00~15:30

島根県を上空から撮影した《JP-32》を、本展に出品されない作品も含めてスライドショーで公開します。
出演:松江泰治(本展出品作家)
会場:多目的ギャラリー/入場無料/当日先着80名

ギャラリートーク(学芸員による作品解説)

10月7日(日)、10月21日(日)、11月11日(日)

●●その他のイベント●●

グラントワ tea ガーデン「幻想茶」

10月14日(日)11:00~

飲んでいるうちに色が変わる不思議なお茶をどうぞ。

会場:美術館ロビー
先着100名/無料 ※企画展観覧券またはミュージアムパスポートが必要

開館記念感謝祭「きんさいデー」10月7日(日) 美術館は終日無料開放!

敬老週間 9月15日(土)~24日(月・祝) 年内に65歳以上になる方は美術館観覧料が無料

●●会期中の特別展●●

浮世絵にみる遊び心ー島根県立古代出雲歴史博物館コレクション 9月20日(木)~11月5日(月)

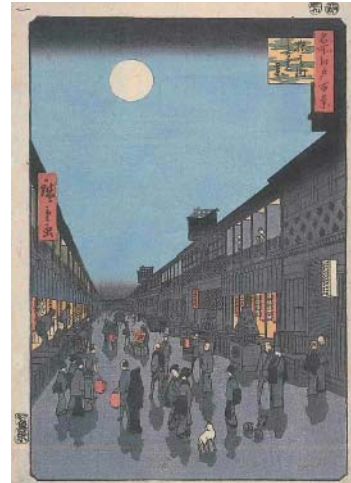
島根県立美術館コレクション 色あそびの世界ーあかしくろししろし 7月20日(金)~9月17日(月)

【問合せ先】 〒698-0022 島根県益田市有明町5-15 島根県芸術文化センター「グラントワ」内 島根県立石見美術館
TEL0856-31-1860 FAX0856-31-1884 <http://www.grandtoit.jp>
担当:吉岡(よしおか/広報)、田原(たばら/広報)、川西(かわにし/学芸)、南目(なんもく/学芸)

●めがねと旅する美術展 特設サイト <http://torimega.com/megane>

●トリメガ研究所 twitter、facebook、Instagramでも展覧会情報発信中!

*トリメガ研究所= 工藤健志(青森県立美術館)、村上敬(静岡県立美術館)、川西由里(島根県立石見美術館)の3名による視覚文化研究チーム。2010年に「ロボットと美術」展、2014年に「美少女の美術史」展を開催。展覧会の新しい形を模索しながら活動中。



歌川広重
《名所江戸百景 猿わか町よるの景》
1856年 島根県立美術館蔵
*前期展示(10/15まで)



歌川豊春
《江戸名所 新吉原之図》
1768-72年頃 島根県立美術館蔵
*前期展示(10/15まで)

グラントワ Grand Toit プレスリリース

企画展

めがねと旅する美術展

江戸時代から現代までー「みる」ことの探求

2018年

9月15日[土]ー11月12日[月]

島根県立石見美術館

(島根県芸術文化センター「グラントワ」内)

【開館時間】 10:00~18:30(入館は18:00まで)

【休館日】 毎週火曜日

【観覧料】 [企画展] 一般1,000(800)円、大学生600(450)円、小中高生300(250)円
[企画展・コレクション展セット] 一般1,150(920)円、大学生700(530)円、小中高生300(250)円
[前売券] 企画・コレクション展セット900円
※()内は、20名以上の団体料金

【主催】 島根県立石見美術館、しまね文化振興財団、日本海テレビ、中国新聞社

【後援】 芸術文化とふれあう協議会

【助成】 一般財団法人地域創造

【協賛】 ヤマトグローバルロジスティクスジャパン株式会社 【協力】 株式会社東京メガネ、株式会社アートボックス

【企画】 トリメガ研究所

●江戸時代から現代までの「みる楽しみ」が集結!●

「めがね」は「みる」ことを補助する器具ですが、本展ではこれを、世界を知るための、あるいは見えないものを見るためののぞき窓としてとらえます。アーティストたちが広い世界を、あるいは見えない世界を表すために制作した美術作品もまた、私たちに様々なイリュージョンを見せてくれる「めがね」といえます。

展示室には、遠く離れた景色を望遠鏡のように間近に見せる風景画や、普通では見えないものを露わにする透視図、レンズや錯視の効果を利用した「だまし絵」、最先端のVR(ヴァーチャルリアリティ)など、江戸時代から現代までの多彩な作品が一堂に会します。

●本展ならではの多彩なラインナップー出品作家・作品・資料●

【出品作家】(五十音順)

新井仁之/新井しのぶ、飯田昭二、家住利男、池内啓人、石内都、市川平、伊藤隆介、稲垣足穂、今和泉隆行(地理人)、入江一郎、岩崎貴宏、上田信、歌川国貞(二代)、歌川国貞(三代)、歌川国芳、歌川重清、歌川豊春、歌川広重、江戸川乱歩、生頼範義、大洲大作、大畑稔浩、金氏徹平、金巻芳俊、岸田めぐみ、北尾政美、桑原弘明、黒川翠山、小池富久、小糸源太郎、五島一浩、今純三、今和次郎、佐竹慎、司馬江漢、鈴木理策、諏訪敦、高松次郎、田中智之、谷口真人、谷崎潤一郎、千葉正也、塚原重義、椿椿山、東京モノノケ、中ザワヒデキ、中村宏、丹羽勝次、野村康生、原在正、平川紀道、不染鉄、前田藤四郎、松江泰治、松村泰三、松山賢、伝円山応挙、棟方志功、元田久治、森村泰昌、門真妙、安田雷洲、やほみ、山口晃、山口勝弘、山田純嗣、山本大貴、宵町めめ、吉開菜央、吉田初三郎、米田知子、リュミエール兄弟、和田高広

東京大学大学院廣瀬・谷川・鳴海研究室+Unity Japan(松本啓吾、鳴海拓志、築瀬洋平、伴祐樹、谷川智洋、廣瀬通孝)、東北芸術工科大学総合美術コース松村泰三研究室、北海道教育大学美術・デザインコース映像研究室、めぐりあい JAXA 実行委員会(五島一浩、澤隆志)、理化学研究所脳科学総合研究センター

【出品作品・資料・装置】

浅草・凌雲閣関連資料、アンティーク眼鏡、驚き盤(ヘリシオネグラフ)、カメラオブスクラ、源氏物語屏風、『重訂解体新書』、自動パノラマ鏡、ステレオグラム、ソーマトロープ、泰山鏡(眼鏡絵器具)、泥絵、TVアニメーション「名探偵ホームズ」(エンディング映像)、反射式覗き眼鏡、パノラマ画、ピープショウ、眼鏡絵、洛中洛外図屏風、等



【みどころ1】 展覧会のための新作アニメ 《押絵ト旅スル男》

展覧会のコンセプトにあわせて制作したアニメを会場で上映します。江戸川乱歩の「押絵と旅する男」を、気鋭のアニメーション監督が大胆にアレンジ。明治中期と昭和初期を往還し、レンズの持つ魔力に翻弄された兄弟の物語を幻想的に描きます。(上映時間約 10 分)

監督：塚原重義
 声の出演：細谷佳正、梶裕貴、坂本頼光
 キャラクターデザイン・作画監督：やほみ
 音楽：アカツキチョータ
 プロデューサー：迫田祐樹
 企画：トリメガ研究所 (川西由里、工藤健志、村上敬)



©めがねと旅する美術展実行委員会/トワフロ/塚原重義

【みどころ2】 めがね好き必見！アンティークめがね&「めがね」のアート

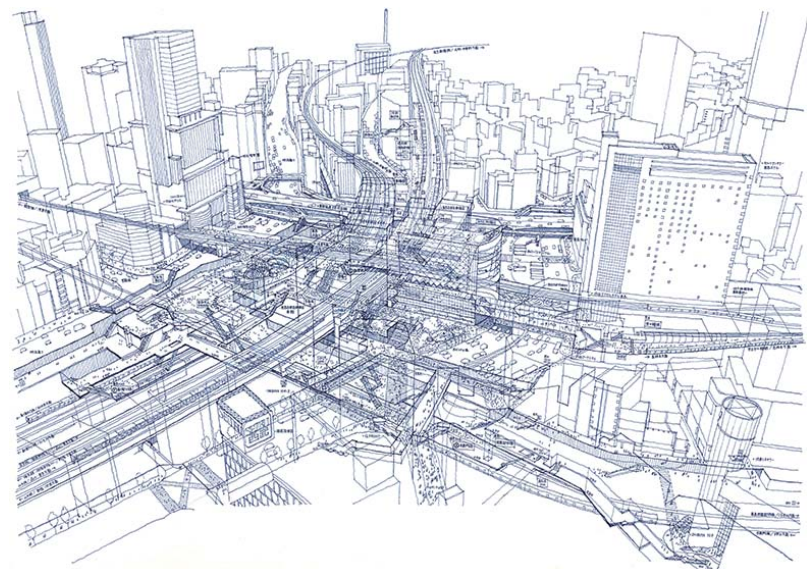
展示室ではまず、18-19 世紀のヨーロッパを中心としたアンティークめがねのコレクション (株式会社東京メガネ蔵) がお出迎え。つづいて、めがねやレンズ、鏡にまつわる現代アートの多彩な表現をご覧ください。



(左) 《銀メッキ製スプリングローネット エナメル装飾》1840-50年代 株式会社東京メガネ蔵
 (中) Mr.《加奈-蒼き花-》2018年 ©2018 Mr./Kaikai Kiki Co., Ltd. All Rights Reserved.
 (右) 米田知子《谷崎潤一郎の眼鏡 - 松子夫人への手紙を見る》1999年 森美術館蔵 copyright the artist, courtesy of ShugoArts

【みどころ3】 人体から大都会まで、秘密をのぞくスコープ

肉眼では見えないものを見せてくれるのも、美術の力。身体の中を見せて江戸時代の人々を驚かせた『解体新書』から、渋谷の街を“透視”したドローイングまで、さまざまなものの「ひみつ」をのぞく作品が集合。



(左) 田中智之《渋谷駅解体 2011》2011年 作家蔵
 (右) 南小柿寧一 (画)、中伊三郎 (銅板)『重訂解体新書図譜』1826年 津和野町郷土館蔵

【みどころ4】 「空とぶめがね」で見る島根県

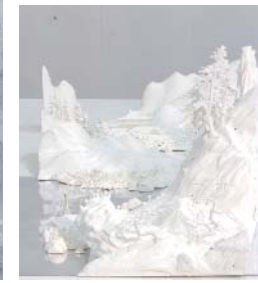
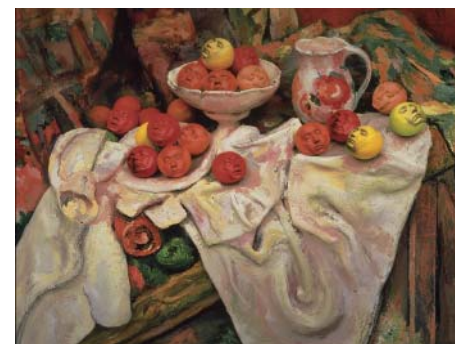
この広い世界を一望したいという欲求は人類に普遍のものです。テクノロジーの発達と、アーティストの想像力や鋭い観察眼の結びつきが、見慣れた風景に新しい視点を与えてくれます。

(右) 松江泰治《JP-32 04》2018年 作家蔵 ©TAJII MATSUE, Courtesy of TARO NASU
 *本展のための新作のうち、グラントワ周辺の風景など6点を初公開
 (下) 吉田初三郎《島根県観光鳥瞰図》1930年 島根県立古代出雲歴史博物館蔵



【みどころ5】 2次元と3次元のあいだー「絵画」のひみつを探る

絵画や写真はいずれも「世界ののぞき窓」として3次元の世界を2次元平面に表すメディアですが、両者は似て非なるものです。雪舟の山水画やセザンヌの静物画を立体として作り、それを写真に撮った作品は、いったい何次元の表現でしょうか？絵画、写真、立体といった美術の表現と、私たちが現実として認識するこの世界との関係を問う作品を見ながら「えがく」ことについて考えてみましょう。



(左) 森村泰昌
 《批評とその愛人》7点組のうち
 1989年 静岡県立美術館
 (中) 山田純嗣
 《(14-5) 秋冬山水》のうち秋景
 2014年 池原操氏蔵
 (右) 山田純嗣
 《秋冬山水》のうち秋景 ジオラマ
 2014年 作家蔵

【みどころ6】 石見出身アーティストの競演



本展には、3名の石見出身のアーティストが参加します。油彩画による写実表現を追求する大畑稔浩の作品には、私たちの目を風景の奥へ誘導する絵画ならではの仕掛けが隠されています。野村康生と平川紀道は、いずれも3次元以上の「高次元」の概念を目に見える形で表すことを目指していますが、そのアプローチは異なります。このたびは野村は絵画の連作、平川はコンピュータによる計算を用いた映像作品を出品します。それぞれの作品から何が「みえる」のか、ぜひ展示室で体感してください。

(左) 大畑稔浩《春の予感》1993年 東京ステーションギャラリー蔵
 (下左) 野村康生《Noctis Labyrinth(夜の迷宮)》5点組のうち 2017年 (写真は展示風景)
 (下右) 平川紀道《a study for spacecolortime》2018年 (写真は展示風景)

